



医療法人幸生会

琵琶湖中央リハビリテーション病院

Biwako Central Rehabilitation Hospital

- 日本医療機能評価機構・リハビリテーション(回復期)高度・専門機能認定病院
- 日本リハビリテーション医学会認定研修施設

地域とともにつなぎあい
患者とともに歩む医療

病院だより

第154号
2023/11/15

先端物理療法機器の実力 ～ショックマスターの効果～

今回は、当院で昨年に導入した「ショックマスター」を紹介します。ショックマスターは、近年注目されている圧力波を放出する物理療法機器です。これは、日本人メジャーリーガーやJリーグチーム、プロゴルファーも使用しています。

そのエネルギーは正常な組織はそのまま通過し、骨表面や腱・靭帯などの変性した組織に作用します。主な効果は、即時的な除痛効果とその後の組織修復効果とされています。

その歴史は1960年代、尿路結石に対する碎石治療法の研究から始まり、その研究が進む中で、組織の治癒促進が注目され、整形外科領域でも適用となりました。2012年より「難治性足底腱膜炎」に対する保険診療が可能となっています。

現在、スポーツ障害の分野でも除痛効果や組織修復効果に加え、筋などのコンディショニングに活用されており、変形性関節症、手根管症候群、痙縮なども適応として挙がっています。

ショックマスターには自分自身、即時的な効果を実感しています。患者さんの中でも、慢性期の痙縮を有する方や、腱板断裂後の可動域制限をおこした方に照射し、その効果を実感したことを複数の学会で発表しました。

今後、更なる適応の広がりが注目される機器です。

心臓疾患や悪性腫瘍、ペースメーカーなどの電磁障害の影響を受けやすい医療機器を使用されている方等には、使用ができないこともありますので、医師への相談が必要となります。

理学療法士 松浦 陵平



嚥下内視鏡検査(VE)について

「嚥下障害」という言葉をご存じですか。「嚥下」すなわち「飲み込み」に「障害」を生じた状態を指します。つまり、(飲)食物を口に入れ、かみ砕いて飲み込むまでの一連の流れ、「食べる」過程に対する障害を「嚥下障害」と呼ぶのです。

「食べる」ことはエネルギーを摂取し生命を維持するための非常に重要な行為です。この過程に問題が生じると、大げさに言えば生命にかかわる事態に発展しかねません。軽度であるならば「食べにくさ」「ムセ」などといった「食べる」という行為に不快感や、行い難さが生じるでしょうし、重篤な場合は「誤嚥性肺炎」という病気に発展してしまうことがあります。この「誤嚥性肺炎」、厚生省の統計では死因順位の第6位に位置し、高齢者ほど死亡率が高いことから、その対策が重要視されています。

とはいえ、自身が健康な状態であるとき嚥下障害を意識されることは殆どないと思います。また、飲み込みがし難い、できない、という状態を想像するのは難しいかもしれませんが、「嚥下障害」は脳の病気や神経疾患、加齢などで生じる障害です。現在の自分が健康であっても、将来的に直面する可能性を否定できないのも事実です。

病院には嚥下障害に対して専門的に評価・リハビリを行う「言語聴覚士」というスタッフが在席しています。かく言う私自身も、その一員です。

言語聴覚士は患者さんが安全に食事をとってもらえるように、訓練プランを立てトレーニングを行います。そのためには嚥下機能を

より正確に評価する必要があります。特に飲み込みが起こるタイミング(咽頭期)の評価は重要で、経口摂取が可能(安全)であるかどうかの大きな因子です。これらを精査する方法の一つに嚥下内視鏡検査(videoendoscopic examination of swallowing: VE)があります。

VEは嚥下障害に対して優位性が高い検査です。具体的な方法は、鼻から喉に内視鏡を挿入し、その状態で(飲)食物を食べることで、飲み込みの動作を観察するというものです。内視鏡によってリアルタイムに挙動を観察できるので、飲み込む前後の喉(咽頭/喉頭)の状態が明確になります。そのため、普段の食事と同じ食物を使ったり摂食の姿勢に応じて評価が可能であるため、問題点の発見や患者さんに最も適した方法の検討ができます。

取り回しの良さも利点の一つであり、検査時間は15～30分程度、器材はポータブルでベッドサイドでも評価が可能です。

現在、当院では京都大学病院から専門医を招き、言語聴覚士や嚥下の認定看護師とともにVEによる嚥下機能の評価を行っています。それら評価をもとに嚥下障害にお困りの方の食生活の改善やリスクの低減など、患者さんの「安全に食べられる/安心して食べられる」を支援していきます。

もし、あなたやあなたの身近な方に、次のようなサインを認める場合は注意が必要かもしれません。

1. 喉がゴロゴロなる
2. 食事中にせき込む(むせる)
3. 痰がたくさん出る
4. 喉に残留感がある
5. 食べるとすぐに疲れて時間がかかる、全部食べられない
6. 食べたことに関連して熱が出やすい

など、これらは嚥下障害のサインと思われる徴候です。

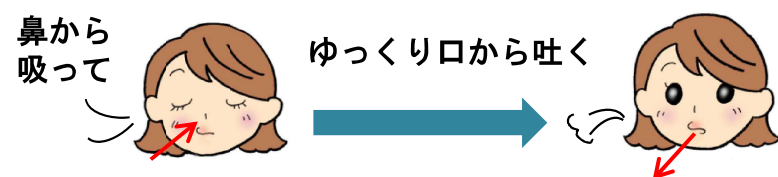
深刻な状態に陥る前に早期の受診や診断をお勧めします。

食べたいときに食べたいものが食べられるというのは、実はとても“口福”なことだと思います。この“口福”を大切にしてください。この“口福”を大切にしてください。この“口福”を大切にしてください。

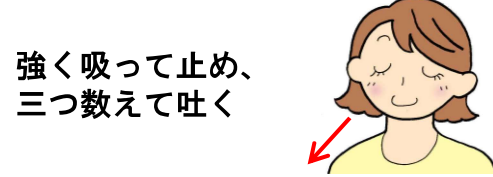
言語聴覚士 竹村 淳

美味しく食事をするために 食べる前の「お口」の準備体操

①深呼吸1 腹式呼吸を意識して、3回くらい行いましょう



②深呼吸2



③首を回す



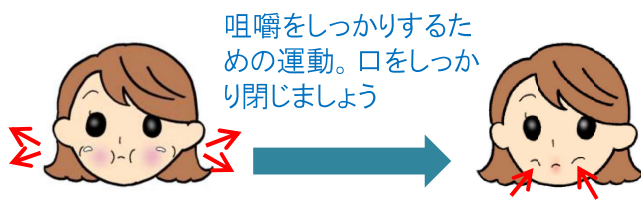
④首を倒す



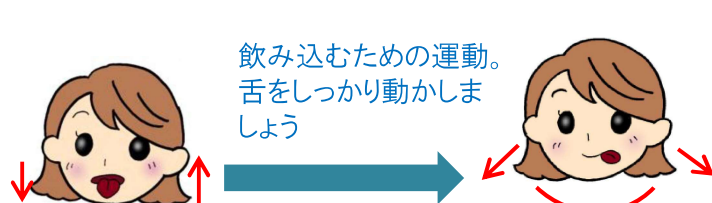
⑤肩を上げ下げする



⑥頬を膨らませたり、すぼめたり



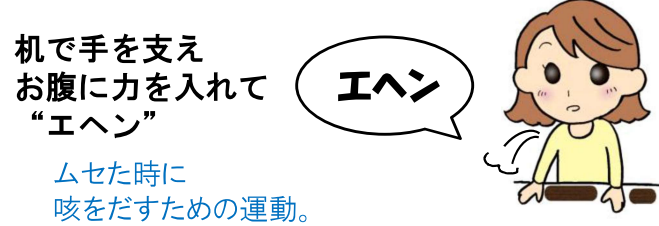
⑦舌を出したり引いたり



⑧はっきり言う



⑨咳払い



©2023医療法人 幸生会 琵琶湖中央リハビリテーション病院

出前講座 お茶の間教室「はつらつサロン」

◎膳所学区福祉講座 あすなる会の皆さんと◎

長い夏の日差しがようやく遠のき、秋の気配が漂い始めた9月末の土曜日、膳所学区社会福祉協議会 福祉講座の一環として、はつらつサロンを開催させていただきました。

広い会場の後ろには、おなじみお手玉レクリエーションブースと新作の魚釣りレクリエーションコーナーを設置。開会前の少しの間でしたが、窓から入る陽だまりの中で、幼い頃に帰ったような無邪気な笑顔で楽しんでくださるご参加の皆さん姿が見られました。

今回は、認知症予防体操と満を持して作った『おうちでできる「膝」「肩」「腰」体操』のリーフレットを参考にした体操を主軸とし、皆さんに楽しんでいただきました。

認知症予防体操では、少数のグループに分かれてリズムをとりながら課題をクリアしていきました。それぞれのグループの個性豊かな実践を見せていただいて、こちらも勉強になることばかり。

やってみると意外と難しい実践でも、広い会場いっぱい溢れる笑い声や掛け声が周囲をより活気づけます。

「今日は童心に戻って楽しかった」とキラキラした顔で帰って行かれる姿を見たときに「今日も頑張ってたよ」と感謝の気持ちでいっぱいになりました。



理学療法士 小西 純平
作業療法士 豊田 凜
社会福祉士 上嶋 美由紀



【病院理念】

慈(めぐみ)の源“マザーレイク”のように、私たちは地域の皆さまの心と体のよりどころとなるよう努めます。

【基本方針】

1. すべての職種が協働し、生活を支えるリハビリテーションの実践に最善をつくします。
2. 患者の意思を尊重し、科学的根拠と倫理観に基づき、安全と安心の医療を提供します。
3. 医療・介護・福祉連携を推進し、地域包括ケアシステムの推進に貢献します。
4. すべての職種のたゆまぬ研鑽により、質の高いチーム医療をめざします。
5. 人材の育成に努めるとともに、職員が働きがいと充実感の持てる職場づくりをめざします。

第21回日本神経理学療法学会 発表(ポスター)

(9/9・10 パシフィコ横浜)

慢性期脳卒中患者に対する 圧力波治療器の痙縮改善効果検証 ~ケース別の報告~

理学療法士 松浦 陵平

滋賀県病院協会 第34回 ソフトボール大会結果



10/1 滋賀県病院協会主催の第34回 ソフトボール大会で当院は第3位を獲得しました。

選手の皆さん、お疲れ様でした!